んなに知ってほしいと思ったのがきっかけだ。稽古を重ねて迎えた本番当日、観客の同級生たちに笑いが伝わった瞬間がこの上ない喜びで、多様な人間のチームで作品をつくり上げる楽しさを味わうことができた。

三年目のUWC

二年間のUWC生活を終えた後、私はパキスタンに新たにできる学校、CHANDBAGH中学校でボランティア活動をすることになった。かつてUWCで教えていた教師がその学校の校長になるということで、そのサポートに行ったのだ。CHANDBAGH中学校は、パキスタン第二の都市、ラホール近くの小さな村にある全寮制の男子校だった。私は図書館の司書や、クラブの顧問などをする「何でも屋」で、教師でも生徒でもなかったため、さまざまな立場の人と毎日話すことができた。また、知人を頼って国内各地も訪れ、自然も生活も豊かな側面をみるうち、パキスタンという国の印象が全く変わっていく。そのころ、パキスタンはインドとの間で核実験の応酬を繰り広げており、「危険な国」というイメージばかりが目立っていた。しかし、実際の国を知れば知るほど、「素」の部分をもっと多くの人に知ってほしいという思いが募るようになった。

卒業10周年の同窓会にて。左から２番目が筆者

素の世界を伝えるために

大学卒業後、知らない土地を訪ね歩くことができ、そこでの発見を人々に伝えることができる仕事として、テレビの番組制作を選んだ。

日本で初めての地方暮らしになった名古屋や岐阜で過ごした日々は、UWCのときとはまた違う意味で驚きと発見の連続だった。人生の大先輩にあたる人たちや、同じ日本でも、自分と全く違う環境で生きてきた人々との出会いを通じて、人を理解することの難しさを改めて実感した。しかし、人を理解しようとする姿勢のベースには、UWCで世界中の高校生と過ごし、コミュニケーションを図った経験が欠かせない。異なる文化や習慣を抱えていても、お互いの共通項を見いだしたり、思いもつかなかった考えや気持ちを知り、理解を深めた経験が役立っているのだ。そして、伝えたいことが伝わる喜びも、UWCでの経験が原点にある。

三月十一日、東日本大震災が発生した。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々へ心よりお見舞い申しあげたい。震災発生以来、世界各国から数多くの激励のメッセージが届いた。海外で支援活動を始めた友人たちもいる。私も報道機関に携わる一人として、微力ながらできるかぎりのことをしていきたいと思っている。

最後に、UWC留学というかけがえのない機会を与えてくださったUWC日本協会の方々に深く感謝申しあげたい。

演劇クラスの仲間たちと。下から２番目が筆者

ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)の詳しい情報については、
http://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/UWC/index.html参照

体にしみ込んだ「伝わる喜び」

NHK制作局ディレクター
渡部祐樹（わたべ ゆうき）

一九九六―九八年、UWCアトランティックカレッジ（英国）留学。オックスフォード大学数学部卒業。二〇〇五年、NHK入局。名古屋局、岐阜局を経て現所属。現在の主な担当番組は「サラリーマンNEO SEASON6」。

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五三名の卒業生を輩出している。

漠然とした憧れで渡英

日本を飛び出して、知らない世界をみてみたい――私は東京での高校生活に何となく物足りなさを感じ、海外への留学にあこがれていた。高一の冬、学校でふと目にとまったのが、掲示板に張られたUWCのポスターだった。私は「これだ！」と思い迷わず応募、しばらくしてアトランティックカレッジへ留学することになった。

夢のような学校環境

アトランティックカレッジは、ロンドンから西へ車で三時間、ウェールズ地方南部の海岸沿いにある自然豊かな学校だ。キャンパスの歴史は古く、十二世紀に建てられた城が中心になっている。ここで世界八〇カ国以上から集まった約三五〇人の生徒たちが、二年間にわたり寝食をともにする。在学中は国際バカロレア（IB）と呼ばれる高校卒業資格の取得を目指し、語学、数学、歴史、芸術などの分野から六科目を選択して学ぶほか、海難・山岳救助や福祉施設訪問など、社会奉仕活動への参加も必須となっている。

表現する難しさと伝わる喜び

私にとってカレッジは、まさに「ユートピア」だった。育った背景も文化も違う同級生との毎日は発見に満ちていた。もちろん、暮らしのなかで衝突することもあり、すべてが楽だったわけではない。得意だったはずの英語もすぐさま苦手分野になり、自分を表現できないフラストレーションがたまることはよくあった。しかし、同じ十代後半の若者として、国籍に関係なく肌でコミュニケーションを図り、多くのことを知るプロセスは非常に刺激的な時間だった。

私がコミュニケーションの醍醐味を身をもって感じたのは、「演劇」の授業を通してだった。何か新しいことを始めたいと、軽い気持ちで「演劇学」をIB科目の一つに選んだ私。しかし、始まってみると、授業は苦痛でしかなかった。ネイティブスピーカーと同じようにせりふの行間を読み取り、言葉で表現する困難さ。最初は照れも抜けず、即興ではせりふすら出てこなかった。しかし、徐々に慣れていくにつれ、演劇は「普段の自分」にできないことが表現できる別世界を与えてくれる存在になった。役を借りて、普段できない表現をすることで、新しいコミュニケーションツールができたのだ。また、本当に伝えたいと思ったことが伝わるときの快感も、演劇を通じて得られた。忘れられないのがUWC生活の終わりに上演した「英語狂言」。一時帰国した際に観た狂言の面白さに感動して、み